環境問題を考える

九州工大名誉教授　伊　木　貞　雄

Ⅰ　公害問題の推移

(1)　日本の公害問題

日本に於ける公害は，工業の急激な発展によるＧＮＰの増加に伴って多様化し，拡大し，深刻化して，世界一の公害国となり，公害列島，公害の見本市，公害の先進国などの汚名をほしいままにしている。昔の「国敗れて山河あり」は今では「国栄えて山河なし」に変ってしまった。その原因にはいろいろあるが，人口の都市集中と工業の発展が欧米先進諸国に比し，そのテンポの速いこと，日本の地形や地勢などの自然条件が公害をひきおこし易い状態であること，日本の輸入原油の90％以上を占めるアラビヤ湾沿岸諸国の原油に硫黄分が多く，いおう酸化物による汚染問題が特に深刻であること。都市計画その他の福利衛生施設の立ちおくれ，日本人の社会生活における公徳心の低さなどがその主なる原因と考えられる。特にこの数年来の急激な汚染の進行は，汚染物質の放出が，大自然の自浄作用の勢力の域をこえたためと考えられる。

(2)　公害問題から環境問題へ

初め媒煙問題から次々に新たな公害問題が続発し，更に公害問題は環境問題へと進展した。その地域も，初めの工業都市から日本列島の全域へ，更に全地球の問題となった。公害問題としての加害者と被害者との対立の関係から脱却し，すべての人が加害者であると同時に被害者でもあるという認識の下に，人類共有の貴重な，かけがえのないこの地球を護ることが環境問題の目標とされる様になった。

(3)　公害問題に対する考え方の混乱

公害問題や環境問題に対する考え方は今や混乱の状態にあると云える。すべてを割り切って考える傾向のアメリカでも，公害問題の３つのＣ (Concern, Conplexity, Confusion) が指摘されている。人類と地球の将来に対する悲観論もすくない。例えばカールソン女史の「沈黙の春」ローマクラブのメドウス報告のいわゆる「地球有限論」テイラーの「人類に未来はあるか」など。国連の人間環境会議は，この考え方の混乱に対し，人間環境の保護と向上に関し，世界の人々に示唆と指針とを与えるため，共通の見解と原則とが必要であるとの考えから開催されたもので，環境問題は国際協力が行われる平和な世界に於ては，解決可能であとの根本信念に基いている。

Ⅱ　環境問題に関する考え方

(1)　物の豊かさと良い環境との調和――この両者の調和は万物生存の基磐であり，生存権の根底であって，法律や規則以前の問題である。公害基本法や大気汚染防止法で，産業の健全なる発展との調和の項を削除したのは人間優先の立場を明かにした意義は大であるが，深く人間生存の原理に照して見れば，大きな過誤を犯していることが判る。人間環境会議における南北問題，開発途上国における環境問題が３Ｐ (Population, Poverty, Pollution) であることなどを見れば自ら明かである。筆者は予てから人口の増加，資源と生産，環境汚染の３者をもって，環境問題を考える基磐としている。

(2)　環境問題は解決可能である――公害は人災である。人によってひき起された災害は人によって克服できないはずはない。人間環境会議におけるパルメ，スエーデン首相の観迎演説でも「環境問題の解決は可能である。しかしそれには平和な世界，国際協力の行われる世界においてのみ可能である」と云って，世界の人々に環境問題の将来に対する希望と勇気とを与えたことが高く評価されている。環境汚染は，これまで考えられている様に，必ずしもＧＮＰに比例するものでなく，また完全に汚染物質を人力をもって排除する必要もない。只大自然の自浄作用の範囲内に止めることが必要である。大自然はそれ自身本来ある程度の

有害物質を含み，人類はその発生以来それに適応し，或はそれを克服してその生存をつづけている。例えば有害金属についてもクラーク数に示される如く，地球の表面には，各種の金属類が相当量含まれていることが判る。

(3) 社会連帯と協力――環境問題は地球という人類共有のかけがえのない財産を確保し，これを将来の世代にのこすことを目的とするから，社会連帯の精神と協力とが絶対に必要で，これなくしてはその解決は困難である。これには国内的には国，地方自治体，住民，企業などが夫々その立場に応じて協力することが必要であり，国際的には平和な世界で，各国が協力することが必須の条件である。対立や抗争は，環境問題の本質を理解しない迷妄で，同題の解決に何等役立たないのみならず，却って有害である。従って，環境問題に対しては，全地球的な立場に立って，企業の利潤追及のみに走り勝ちな企業エゴを強く戒めると共に住民エゴ，地域エゴも厳しく戒しめる必要がありこの協力の線にそう正しい住民運動の育成が必要である。

(4) 環境問題と科学の重要性――環境問題は，あくまで常静な科学的な問題である。政治上のイデオロギーや単なるスローガン，感情や時勢のムードなどで対処し得る程単純な問題ではない。総合科学（理学・工学・医学・衛生学・農学・森学・水産学・海洋学・気象学など）の進歩が解決の鍵であり，そのおくれが，今日の公害問題の激化や，考え方の混乱などの源をなしている。規制の基準にも未だ確実な根據を欠ぎ，且つ流動的で，公害に対する人心の不安の源ともなっている。厳正な学術の進歩と共に公害問題についての民衆の啓蒙も必要である。

(5) 公害防止と物資の有効利用――人間の生活や生産活動における不用物の廃棄が環境汚染の原因であるから，廃物の回収利用など，物資の有効利用の技術の向上によって公害の源泉を抑へ，公害を防止すると共に，企業の経済性を高めることも可能で，公害防止は必ずしも経済上マイナスの面ばかりではない。100％化学の実現や廃物廃水の再生利用などの研究も必要である。またこれと同時に企業の生産品とそれに伴う悪影響を事前に調査点検する所謂テクノロジー・アセスメント制度（T．A制度）や，環境アセスメントなどもとり入れて，公害を未然に防ぐなど，企業のあり方にも，根本的に考えなおすことも必要である。

(6) 環境確保と綜合計画――公害の排除や，環境の汚染破壊の防止などには，単に技術的な方法のみではその効果に自ら限度があり，更に広い視野に立って，都市計画，土地利用計画，道路計画，工場立地計画などと共に，綜合的に基本計画を樹てる必要がある。またその計画に基き，都市の再開発，新工場団地の造成などにより，住工分離，緩衝余地の造成など，大局的な立場から，自然環境の保護，復元などの問題に対処する必要がある。

(7) 現代文明への反省―物と心の問題――環境問題や公害問題は，終局的には人間の公徳心の問題，物と心との調和の問題である。公害と環境破壊は現代人の過度の物慾の報いであるとも云い得る。自然は生きており，人間は自然の一部であり，自然を亡ぼすことは自らを亡ぼすことに外ならぬ。而して環境問題の将来については，地球上の人口と物資と環境保護との調和の立場から対処し，現代物質文明への反省をもととして，物と心との調和した豊かにして美しい世界の実現をめざして進むべきであると思う。